

平成27年3月19日

識字率向上月間

3月は識字率向上月間です。国際ロータリーは、1986年世界運動として、識字率向上を重要課題に採択し、3月度を強調月間として推進しております。また、ロータリー財団の6つの重点分野の中にも「識字率の向上」が明記されています。この運動はユネスコ協会と連携して行っています。

2015年現在の世界の人口は、73億2478万人で、10年後の2025年には80億8341万人に達するであろうとの予想です。しかし、ユネスコの推計によりますと、世界にはいまだ7億7600万人の読み書きのできない方がおられ、特に女性は世界の非識字率人口の64%を占めていると言われています。世界183カ国の中で識字率90%以上の国は104カ国ある一方、70%に満たない国が33カ国、50%にも満たない国が12カ国もあります。

識字率とは、一定の地域で「15歳以上の人口に対し、日常生活に支障なく文字の読み書きのできる人の割合」を表します。

読み書き、計算能力が社会に与える恩恵は議論の余地がありません。識字社会では、経済発展もより速やかで、健康問題についての認識も高く、特に女性の識字能力は、教育的、社会的、経済的活動の参加に大きな扉が開かれます。

各地域で非識字率を生み出す背景は、様々です。戦争、自然災害、貧困、社会的差別、移民・難民などがありますが、トルコなどイスラム圏では宗教的影響で成人女性の識字率が低く押さえ込まれています。ここから派生する問題としてトルコが直面しているのが、高い乳幼児の死亡率であります。文字を読めない母親が引き起こす薬の事故が多いそうです。

日本では統計上識字率は99.8%であり、残りの0.2%は知的障害者、言語障害者と言われていますが、これらの人々は、補助器具による識字も可能ですので実質100%と言えます。

日本では室町時代の1443年に朝鮮通信使一行に参加して日本に来ました申叔舟しんしゆくしゆうという学者は「日本人は男女身分に関わらず全員が字を読み書きする」と記録し、また幕末期に来日したヴァーシリー・ゴローニンは「日本には読み書きできない人間や、祖国の法律を知らない人間は一人もいない」と述べています。これらの記述には誇張があると思われませんが、近世の日本の識字率は実際はかなり高く、江戸時代に培われた高い識字率が明治期の発展につながったとされています。

しかし、日本語の表現力、理解力について最近の若い人には能力が少し劣ってきているように思えます。私も何でもかんでもパソコンに頼っていますので、漢字を忘れる、単語を忘れることが多くなっています。これは、識字率の低下でしょうか、それとも老化現象でしょうか。

この機会に、識字率の問題を再認識し、世界の識字率向上のために私たちロータリアンの意識を深めたいと思います。

なお、次年度から識字率向上月間は「基本的教育と識字率向上月間」として9月に変更されます。